古典への飛翔

馬場あき子

古典への飛翔

馬場あき子

読売新聞社

著者紹介――――――――――ばばあきこ
昭和3年、東京生まれ。昭和女子大学卒業。
現代歌人協会会員。著書は歌集「桜花伝承」、
評論「式子内親王」「鬼の研究」「修羅と艶」
「古典への漂遊」「日本女歌伝」ほか多数。

古典への飛翔
昭和五十四年六月二十九日　第一刷

著者　馬場あき子
編集人　笠井晴信
発行人　深見和夫
発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の十　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の十一　〒八〇二
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　寿製本株式会社

定価　九八〇円

©, Akiko Baba, 1979
0095-702640-8715
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

古典への飛翔

目次

I

飛翔の空間——日本古典と空……9
ことさら露置かせて——枕草子の美と志……18
歌よみの清少納言……32
物語の中の歌の有効性——紫式部の歌……38
妬みをとおしての人間的自覚——道綱の母……43
王朝の美意識……48
つくも髪……55
平家の女人たち……64
力への潜在願望——説話の世界……71
説話の文体……81
長明における数寄と無常……94
日本的怪奇性——秋成の場合……113
日の世界への明察……126

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

神話・その謎的暗黒と現代……130
II
迎春の王祇祭……137
流離の雛……141
盲目のサンヤサマ……145
お染人形……151
桂垣……156
下北の盆の人々……160
雪祭の夜……165
黒川の門笛……169
ほのかな思いの花たち……173
もじずり草……180
泰山木幻想……184
鬼面と重なる横顔……186

まばゆい初心の美……189
みみずくのお医者さん……192

Ⅲ

恋の伝説路をゆく——小町・葛の葉・道成寺……197
会津……210
鬼伝説のふるさとを訪ねて——大江山……218
あとがき……231
収録作品初出誌一覧……233

装丁　栃折久美子

古典への飛翔

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

飛翔の空間——日本古典と空

いつであったか、秋のけはいのただよう日本列島の北端、青森の荒磯に潮騒の音をききながら、サンヤサマとよばれる巫女の神おろしの席に列したことがあった。いくらとも知れない数々の神の名が次々に呼び上げられ、招き寄せられる壮大な量感に圧倒される思いであった。

伊勢の天照大神をはじめとして、住吉・出雲はもとより、はるか九州の宗像神や天神まで、潮騒の音の寄せ返す星月夜の磯に、陸続として集い来るのである。巫女のその時の呼吸によって、力強く歯切れよく降り立つ神もあり、吐く息の末にすがってやっと辿りつく神もある。目を閉じてその神おろしの節をきいていると、その呼び上げられる神名の律が、しぜんとその日の神力をあらわすかのように変化にみちている。

気力をふりしぼったような声とともに、かぼそい盲目の巫女の肩越しに、神はいったいどのようにしてこの地に翔り下って来るのだろう。夏はての波音の荒々しい、まっ暗な海の彼方をみつめながら、その時私は、空翔る疾風のような神々のあとに、かすかな飛行雲のかげが走るのを見るような思いがした。巫道においては現代もなお、空という捉えどころのない融通無碍の空間は、このように超人の自在な飛翔にまかされているのである。

考えてみると、日本の古典がえがいた飛翔空間は、数少ないゆえにどれも印象的だ。しかし、古代神話の世界には、地球より高貴な小惑星が浮んでおり、飛行船のような天の鳥船が水浅黄色の原初の空を翔っていたという空想も、近年では、もっと徹底した現実的ロマンの世界に定着させられ、天の鳥船の翔った空とは、茫洋として黒潮かがやく大海原のことだったと説明される。

詩歌の世界には「久方の空」ということばがあったが、そこにはもはや古代神話のバイタリティはなくなっていた。そして、この捉えどころなく広がる空の高さは、かすかな神韻を含みつつ、季節を推し移らせる雨・雪・風のすみかとして眺められていたかの感がある。けれど、私はなお、いくつかの天女伝説を伝える風土記の空を仰ぎつつ、あの仏画の吉祥天女よろしく、目もあやないろぎぬの裳袖をなびかせ、虚空を遊泳し、三保の松原などからしだいに遠く、名残惜しく消滅していった天女昇天の空に愛着し、その詩情に信頼を寄せる。

いったい、この天女のふるさとは、どこに、どのように想定されていたのだろう。それは月の

世界であり、乙女はその宮殿に奉仕する天乙女なのだという。たとえば能「羽衣」では、その月世界までの飛翔の空間を次のようにうたっている。

住み馴れし、空にいつしか行く雲の、羨しき気色かな。迦陵頻伽の馴れ馴れし、迦陵頻伽の馴れ馴れし、声今更にわづかなる、雁がねの帰りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか帰るか春風の、空に吹くまでなつかしや、空に吹くまでなつかしや。

こんなふうにうたい上げられている空は、あの、すだまや、もののけ、神や超人たちの支配する空間ではない。ここでは、鳥さえも人めき、風さえも情をもち、それらはすべて天女の属する空の世界のふるさとびととしてのなつかしみをたたえている。雁や千鳥や鷗という、愛らしい鳥の翼と、霞をベールのようにときほぐす春風のやわらかなゆくえ、それが月世界までの距離なのである。

「羽衣」の天女が、羽衣を喪うことによって目ざめた、飛べない現実からの空であるゆえに、それはやさしい慰めをもっていたのかもしれず、それは、憧れの心の色だけを自在に浮かべてみせる空間として広がっていたともいえる。

そう思いながら唐突に、私は、またの日の能の舞台に、巨大な魔鬼の天狗を呼び出す「大ベシ」

の笛の音の、澄明な強い音色がりょうりょうと流れていたのを思い出す。能という中世の舞台に甦らせられた天狗の空は、どこか飄逸な明るいさびしさをもって、天女の空に隣合っている。それは仙界のものたちが渡って来る「渡り拍子」という笛についても同じである。これらの笛の音に表現された中世の虚空は、なお自在の空間であることに変わりはないが、それはもはや疾風怒濤の劇を含むものではなく、むしろ、神仙や超人巨魁の、現実の大地を踏む足をもたない架空のものの大らかさ、明るさを情緒としている。したがってそこには飛翔の速度感はなく、空想の広がるままに、しだいに輪郭を濃くしてゆく像が、くっきりとした存在感を獲得するまでの時間がにじむ。

私はこうした笛の音をききながら、たとえばあの『更級日記』の中で、東国の竹芝の男が帝の姫を負うて疾走した七日七夜の逃亡距離の空間を比べてみる。「いと香ばしき物をくびにひきかけて、飛ぶやうに逃げける」と書きしるしたこの作者は、そこにおそらく疾風のような、速度感に充ちた空間をみつめていたことだろう。これはあの「大ベシ」や「渡り拍子」で表現するには不可能と思われる緊張した空間である。

こうした空間は、説話の世界では怪力乱神のものであり、たとえば、大江山の鬼が都の姫を奪い去る空や、茨木童子が渡辺綱を宙吊りにしたまま走る空に近い。高貴な姫を負った下賤の男にだけ与えられる、この目眩むばかりの疾走力と、疾風のような鬼の行動力とが、近似の移動空間

をもっていることは興味深いことだ。激しい意志を帯びて、物を奪い去るときの、この超人的空間を侵す力は、とても人間はもちえないのであった。

「大ベシ」や「渡り拍子」の、あくまで透明な、艶な大らかさが、ふと哀調を帯びてひびくとすれば、こうした怪力乱神たちの、行動的な説話空間の架空性が、自覚されてゆく時代がきていたせいであろう。あるいは、天狗が所有した山から山への空間とは、あからさまに大地を占めることの不可能なもののためにあった、あながちな示威の空間であったゆえにさびしいのかもしれない。

そしてまた、私は、世ばなれた神仙譚の中で、枯木のような二本の足を鶴のようになびかせながら、杖を小脇に、襤褸の衣服をはためかせて飛翔する仙人の姿を想像すると、にわかに日本の空にユーモラスなおかしさを感ずる。久米の仙人が女の肌に見惚れて失速した事件を思い起こすまでもなく、仙人にはどこかかえって人間臭さを感じさせる瓢逸な脱俗者のイメージがあるからである。

神仙譚をみると仙人は仙力によって飛翔の高さに高下があったというが、大和の国で竿打仙人とよばれた仙人などは、俗情があるゆえ七、八尺の高さをしか飛ぶことができず、いつも童子に竿でもって追われていたという。これではまるでとんぼである。久米仙人の風流な大人の空間とは対照的であるが、子供の歓声に囲まれて低空飛行をした大和の仙人には、それでもなお空を飛

ぶ、という仙術への素朴な憧れがみえていておもしろい。そして人々は、このような空をどのように信じ、受けとめ、自分のものとしていたのであろう。

つれづれと空ぞみらるる思ふ人天下りこむものならなくに　　和泉式部

この歌は、平安中期の女流歌人のものだが、この憧れの視野の中に、たとえば「思ふ人」はどのように天下ってくるのであろう。仏教の世界では、空翔ぶ天女のほかに、西方極楽世界からの迎えは、紫雲に乗った聖衆(しょうじゅ)によってもたらされると説明している。瑞雲は四囲に音楽を伴い、家の軒丈ばかりの高さまで降りてくるのである。よく見かける聖衆来迎の図である。和泉式部の憧れにある「思ふ人」も、あるいはこうしたことがヒントになっていたのかもしれない。よく考えれば少し気味の悪い空想である。こんな空に対して、式子内親王は次のような空をうたっている。

花は散りてその色となくながむれば空しき空に春雨ぞ降る　　式子内親王

あらゆる人生の思い出を空(くう)に還元し、還元しつつまた抑えがたい魅力にひかれて、その思い出のために空をふり仰ぐ、いわば、千変万化の心の色を無限に浮かべてくれる空をうたっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook